

第5篇 利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)とへの利潤の分裂。利子生み資本

[利子と起業者利得への利潤の分裂。利子生み資本←エンゲルス版]

[Fünfter Abschnitt Spaltung des Profits in Zins und Unternehmergewinn. Das zinstragende Kapital]

2025.11.09 K・S

(1)第5篇の主題は、表題「利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)とへの利潤の分裂。利子生み資本」に示されている

第5篇(第5章)の主題は、マルクス自身の表題「利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)とへの利潤の分裂。利子生み資本」の中に明確に示されている。マルクスは、第3部の課題を「問題は、資本の過程——全体として考察されたそれ——から生じてくる具体的諸形態を見つけ出して叙述することである」としている。第5章の具体的形態とは、表題の前半部分「利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)とへの利潤の分裂」で述べられている。第3部の他の多くの部分の表題と同じで、剰余価値の転化形態すなわち剰余価値が受け取る具体的形態(産業利潤・利子)である。後半部分の「利子生み資本」は、同じ主題を資本の具体的形態(利子生み資本)に即して論じている。このことを簡潔に言い表せば、**第5章の主題**は、剰余価値に即して言えば「利子と企業利得」であり、資本に即して言えば「利子生み資本」である。

(2)マルクスの利子生み資本論は、「2段階的分析方法」がとられている

マルクスの利子生み資本の理論的分析方法は、「2段階的分析方法」の形式をとっている。すなわち、**第1段階**は、信用制度を捨象して利子生み資本を概念的に把握する方法であり、**第2段階**は、資本主義の信用制度を前提にして利子生み資本の現実的な姿態を分析する方法である。第1段階の「利子生み資本の概念的把握」は、E版の「第21章～24章」で行われており、第2段階の「利子生み資本の現実的な姿態の分析」は、E版の「第25章～35章」で行われている。マルクスの草稿の最後の部分は、「6)先ブルジョア的なもの(E版「36章」)」となっており、この部分は、「利子生み資本の歴史的生成過程の考察」にあてられている。以上のように、マルクス草稿第3部第5章は、①利子生み資本そのものの一般的分析、②利子生み資本が信用制度のもとでとる具体的諸形態の分析、からなる理論的展開部分と、③前資本主義社会における利子生み資本についての歴史的叙述部分とからなっており、全体として「利子生み資本論」を構成している。

(3)マルクスの利子生み資本論は、今日の金融化現象を読み解くヒントを与えてくれる

マルクスの『資本論』を学ぶことの意義は、「単なる物知り」になるためではない。また、今日の時代と無関係に古典を「趣味として」学ぶのでもない。今日の世界経済の本質的な動向を解明し、貧困・飢餓や経済格差のない社会の建設のために、何が求められているのかを解明するために学ぶのである。特に、これから学んでいく「マルクスの利子生み資本論」は、われわれに「今日の金融化現象を読み解くヒント」を与えてくれるであろう。

①今日の「金融化」現象とは、実体経済をはるかに超える金融資産が累積されている現象、さらには、**金融経済の動向が実体経済に対して影響力を強める事態をいう**

近年、資本主義の現状を「金融化(Financialization)」と特徴づける論者が少なくない。1980年代に国際的な金融活動のマネーゲーム化を「カジノ資本主義」と呼んだ論者もいた。リーマンショックがあった2000年代以降、実体経済に比して、金融資産の急速な膨張を現代資本主義の新

たな段階だと強調する研究は増えている。いわゆる「金融化」論である。「金融化」とは、金融市場や金融商品、金融的アクターの多様性と規模が拡大し、景気循環の諸局面に応じて変動はあるものの、ほぼ一貫して実体経済をはるかに超える金融資産が累積されている現象、さらには、金融経済の動向が実体経済に対して影響力を強める事態をいう。

②今日の日本経済は、資本が利潤を追求することがかえって国民生活のいっそうの疲弊をもたらすまでに、資本主義経済が歴史的段階に到達したことを示している

今日の日本経済は、90年代以降「失われた30年」余で顕著なように、積極的な設備投資として現れる現実資本の蓄積は低迷している。したがって、収益最大化ないし経済成長を目指せば、資本市場でのキャピタルゲインの獲得（マネーゲーム）に参加するしか方法はない。あるいは、徹底的な規制緩和を通じ人件費削減を行うか、輸出依存を強める程度しか道はない。これらは、いずれも、格差拡大・雇用劣化を助長し国民経済をいっそう破壊する。現在の「金融化」現象は、資本主義とは利潤の最大化を目的とした社会制度であるのもかかわらず、資本が期待する利潤率・量を実現できないこと、そればかりか、利潤を追求することがかえって国民生活のいっそうの疲弊をもたらすまでに、資本主義経済が歴史的段階に到達したことを示している。

③今日の「金融化」現象とは、「Ⅲ）貨幣資本の蓄積と現実資本の蓄積」の問題にほかならない

今日の資本主義で生じている「金融化」現象とは、まさにマルクスが『資本論』第3部第5篇Ⅲ)で核心にすえた「貨幣資本の蓄積と現実資本の蓄積」の問題にほかならない。また草稿Ⅱ)で対象となる「架空資本」の分析は、貨幣請求権の堆積としての金融資産の本質的な分析である。これらマルクスが信用論で中心テーマとして扱った内容は、「金融化」現象を捉える基礎理論をなすものである。ただし、周知のようにマルクスの信用論は『資本論』のなかでも最難所に位置するだけでなく、MEGA から草稿が刊行されたことにより、現行版（エンゲルス版）『資本論』第3部第5篇はマルクスのオリジナルのテキストとは多くの相違があることが判明している。それゆえ、通説を含む再検討が迫られている。

④「1%のための経済」から「99%のための経済」に転換することが火急の課題である

実体経済指標である世界の名目GDP合計額は87.39兆ドルから94.94兆ドルへと、ほぼ横ばいの1.08倍に留まったのに、金融経済指標の株価や債券価格の上昇などは、GDPの上昇をはるかに上回った。株式や債券投資に縁のない99%の国民諸階層はコロナウイルス禍に直撃され、失業やいっそうの貧困に陥った。でも、富裕層はコロナウイルスの最中に金融資産を増大させた。株価や債券価格が上昇したのは、コロナウイルス禍対策で各国中央銀行が歴史的に例を見ない超金融緩和政策を発動したことで、株式や債券に買い向かう投資用マネーが膨張したからである。目先の利益を追求する金融経済が、人類の生存に不可欠なモノやサービスを生産・販売する実体経済から乖離し、世界のGDPの3～4倍も肥大化させたからである。新自由主義経済政策がつくりだしたのは、「1%の富裕層や株主のための経済」であった。世界各国の国民生活は貧困化し、国民経済と地域経済は披露し、貧富の格差が拡大した。弱肉強食の新自由主義と決別し、「1%のための経済」から「99%のための経済」に転換することが火急の課題となっている。。

（※本項目の(4)①～③の部分は、「宮田惟史『マルクス信用論と金融化』立教経済学研究 第71巻 第3号 2018年」を、④の部分は、「山田博文『資産運用立国の深層』新日本出版社 2024年」を、参考にして作成した。）

第21章 「利子生み資本」

[Einundzwanzigstes Kapitel Das zinstragende Kapital]

I 本章の草稿とエンゲルスの編集について

『資本論』第3部のエンゲルス版(現行版)第5篇第21章「利子生み資本」は、マルクスの第3部用草稿のうちの「第1稿」の286~295ページからまとめられたものである。エンゲルス版のこの章の内容は、マルクスの草稿とほぼ一致している。ここでのエンゲルスの作業は、それまで彼が第3部の草稿の整理をするのにとってきた仕方、個々の文章に手入れすることと、草稿での注や追記を印刷用に整理・配置することであった。

II 本章の構成

本章は63段落からなるが、内容上は主に7つの部分から構成されている。すなわち、①資本機能をもつ貨幣商品と利子、②利子生み資本の独特な流通、③流通過程における商品資本・貨幣資本、④利子生み資本の独自の性格、⑤プルードン「利子論」への批判、⑥利子生み資本独自の運動形態、⑦利子の研究、である。7つの構成項目の文頭に各項目の要点を示してある。諸段落の文頭には、各段落の内容が一目で分かるように、簡単な見出しを太字で付けておいた。

III 段落の要点・内容・論点

[]の数字は段落番号を表す。太字ゴシックは段落の要点である。※()は、私が疑問に思った点・討論で深めたい点・調べてみたい点・自分の見解、等々を述べたものである]

【1】資本機能をもつ貨幣商品と利子 [1]~[6]

- (1)貨幣は、資本として機能する使用価値をもつ特殊な商品になる。
- (2)利子とは、利潤の中から、機能資本家が資本所有者に支払う部分をいう。

[1]生産部面と流通部面の違いはなく、資本は大きさに比例して同じ年平均利潤をもたらす

第3部第2篇においては、一般的利潤率(平均利潤率)は完成した姿態では現れなかった。なぜなら、利潤率の均等化は異なる諸部門に投下された産業資本〔生産的資本〕のあいだでの均等化としてのみ現れたからだ。第4篇での商業資本の参加によって、一般的利潤率は、以前よりも狭い限界の内部で現れるようになった※(1)。今後、一般的利潤率という場合、この平均率の完成された姿態をいう。平均率は産業資本も商業資本も同じである。この平均利潤が問題である限り、産業利潤と商業利潤を区別する必要はない。資本が生産部門に産業的に投下されようと、流通部面に商業的に投下されようと、資本は、その大きさに比例して同じ年平均利潤をもたらす。

※(1)「一般的利潤率は以前よりも狭い限界の内部で現れる」とは？

「一般的利潤率は、以前よりも狭い限界の内部で現れるようになった」と述べているが、「狭い限界の内部に現れる」とはどのような意味で言っているのだろうか。商業資本を捨象して考察した場合は、現実に現れ出る一般的利潤率との乖離が^{かいり}大きかったのだが、商業資本も包含することで、現実の一般的利潤率との乖離が少なくなった(=広い限界ではなく狭い限界で現れる=一般的利潤率の誤差が小さくなった)、という意味で用いられているのだろうか？

[2]貨幣は、利潤を生産するための手段としての商品(一つの特殊な商品)になる

貨幣(ここでは貨幣はある価値額の自立的表現であり、価値額が貨幣形態で存在するか商品形態で存在するかには関わりない)は、資本主義的生産〔資本主義的生産様式←草稿〕の基礎上では

資本に転化されうる。この転化によって、貨幣は、与えられた価値額から、自己自身を増殖し、自己を増加させる価値になる。それは利潤を生産する。貨幣は、貨幣としてもっている使用価値の他に、一つの追加的使用価値、つまり資本として機能する使用価値※(2)をもつようになる。貨幣の使用価値とは、貨幣が資本に転化して生産する利潤のことだ。貨幣は、利潤を生産するための手段としての属性において、商品(一つの特殊な商品)になる。または同じことだが、資本としての資本が商品になる。

※(2)貨幣は、一つの追加的使用価値(資本として機能する使用価値)をもつ商品になる

「貨幣が商品になる」とはどういうことなのか？ あるものが商品になるのは、それが買い手にとって何らかの使用価値をもっているからだ。それでは、貨幣市場で「販売」される貨幣の使用価値とは何であろうか。それは、「一般的等価物として機能するという性質をもったものとしての貨幣」ではなく、「資本として機能するという性質をもったものとしての貨幣」のことである。つまり、ここでは貨幣が、資本として機能するという独特の使用価値をもつ商品となっているのである。

[3]利子とは、利潤の中から、機能資本家が資本所有者に支払う部分である

年平均利潤率 20 % の場合、100 ポンドの価値ある機械〔価値額←草稿〕は、平均的条件のもとでは 20 % の利潤をもたらす。だから、100 ポンドを自由にできる人 (=A) は、100 ポンドを 120 ポンドに変える力 (20 ポンドの利潤を生産する力) を手に握っている。A がこの 100 ポンドを 1 年間、それを使用する B に委託するならば、A は B に、20 ポンドの利潤を生産する力を与えるのだ。年末に、B が A に 5 ポンドを支払うとすれば、B は 100 ポンドの使用価値 (100 ポンドの資本機能、20 ポンドの利潤を生産するという使用価値) に対して、支払いをする。利潤のうち機能資本家 B が持ち主 A に支払う部分は利子※(3)と呼ばれる。利子は、利潤のうち、機能資本家が自分のポケットに入れずに資本の持ち主に支払わなければならない特殊な名称にほかならない。

※(3)「貨幣」という商品に支払われる対価が利子である

貨幣市場では、「貨幣」という商品が売買されている。商品には対価が支払われなければならない。「貨幣」という商品に対する対価と考えられているものが、同じ貨幣の形態で支払われる「利子」である。

[4]100ポンドの所有が、その持ち主に対して利子を我がものにする力を与えるのだ

100 ポンドの所有が、その持ち主 A に対して、A の資本によって生産された利潤の一定部分である利子を我がものにする力を与える。A が 100 ポンドを B に渡さなかったら、B は利潤を得ることができず、資本家として機能することはできなかった。

[原注55]貸し手に利子を与えるのは自然的公正の自明の一原理である(ギルバート)

「利潤を上げる意図で貨幣を借りる人が、この利潤の一部を貸し手に与えなければならないということは、自然的公正の自明の一原理である」(ギルバート)

[5]取引内容が生産様式に照応するならば正当であり、生産様式に矛盾するならば不当である

ギルバートともに、自然的公正を語ることは無意味なことだ。生産当事者たちの諸取引の公正は、生産関係からの自然な帰結として生じるということに基づいている。。法律的諸関係——この形態においては、これらの経済的取引が関与者たちの意思行為として、彼らの共同の意思の発現として、またこの当事者に対して国家によって〔その履行が〕強制されうる諸契約として現れる——は単なる形態であるから、この取引の内容を規定することはできない。法律的諸関係は、取引の内容を表現するにすぎない。取引の内容が生産様式に照応し、適合するならば正当である。

それが生産様式と矛盾するならば不当である。奴隷制は、資本主義的生産様式の基盤上では不当である※(4)。商品の品質をごまかすことも不当である※(4)。

※(4) 資本主義的生産様式の基盤上では、「奴隷制」・「商品の品質ごまかし」はなぜ不当なのか？

マルクスは、「奴隷制」・「商品の品質ごまかし」は 資本主義的生産様式の基盤上では不当である、と述べているが、なぜ不当なのであろうか。このことを考えてみたい。

①資本主義的生産様式における商品の取引（購買と販売）は等価交換の原則が支配する

資本主義的生産様式は 商品交換社会であり、全ての物は商品として生産・販売される。商品の消費者（生産的消費・個人的消費）は商品を購入して生産手段または消費手段として消費する。この商品の取引（購買と販売）は等価交換の原則が支配する。すなわち、同じ等価物どうしが交換される。これが資本主義的生産様式に照応する取引である。

②取引の内容が生産様式に照応・適合するなら正当であり、生産様式と矛盾するならば不当である

「法律的諸関係は単なる形態であり、取引の内容を表現するにすぎない」とマルクスは言う。経済的基盤の上に形成される法的諸関係は、経済構造そのものを規定することはできない（もちろん、経済構造が法律を直接規定するのではなく、相互に影響を及ぼすのだが……）。資本主義の経済では、商品の売買は等価交換の原則が支配する。この原則に照らすならば、等価交換でない「商品の品質のごまかし」は不当である。労働力の時間極めの売買は正当であるが、奴隷制の「人間そのものの売買」は資本主義的経済では不当である。だが、奴隷制社会のように、人格の支配・被支配が経済構造に貫かれている社会では、奴隷の売買は、その社会にとって正当であると見なされていた。この点に限るならば、人間の売買が禁止され、商品交換の場面では「書い手」と「売り手」が対等平等の立場で商品を交換し合うということは、人間の人格的依存関係（人間の支配・被支配関係）をなくし、諸個人の人格を確立する上で、資本主義社会は大きな役割を果たすことになる。

③資本主義社会での「等価交換」は、流通部面における商品交換に限られており、生産部面では公然と搾取（不払労働の略奪）が行われている

だが、資本主義社会での「等価交換の原則」は流通部面での商品交換に限定されたものとなっている（しかも、この等価交換は、資本の利潤追求の強欲によって絶えず破られていることは誰でも知っている）。資本主義的生産様式の内面では、「不払労働の略奪」つまり搾取が公然と行われている。日本の労働者はどれくらい自らが生み出した剰余生産物を奪われているのだろうか。泉弘志氏（大阪経済大学名誉教授）の推計によると、1日8時間労働のもとで、必要労働時間は3時間12分、剰余労働時間は4時間18分になる。1日の労働時間の半分以上が剰余労働（すなわち搾取されている時間）になる。資本家は、労働力の価格（＝労働者の生活費＝必要労働）だけ支払い、剰余労働時間の生産物は労働者が生み出したものであるにもかかわらず、自分のポケットに入れてしまうのだ。この搾取は、資本制社会のもとでは（資本の支配する法体系では）正当なものと見なされているのである（資本=賃労働関係は生産様式に照応するから合法である。）。

④労働者から搾取されているものは、お金だけでなく「自由な時間」も奪われている

しかも、労働者が資本家から奪われているものはお金だけではない。本来、労働者は賃金と同価格の仕事をすればよいのだから、剰余労働時間は労働者の「自由な時間（労働者が自由に処分できる時間）」になるはずである。つまり、1日8時間ではなく、3時間12分働けば資本家が支払う賃金で生活を十分に行えるはずである。剰余労働時間は、資本に支配される時間ではなく、労働者の個性が十分に発揮できる時間に有効に活用できるはずである。マルクスは言う。「資本による自由な時間の横領は、文明——労働者の知的・精神的・文化的発展の横領である。労働者は団結して、資本家に奪われたお金とともに自由な時間を取り戻そう」と。今日の日本の労働運動は、「賃上げと一体に労働時間の短縮を」という戦いに取り組んでいくことが重要である。

[6]Bが資本家として機能するのは、Aが100ポンドをBに委託し、資本として支出するからだ

100ポンドは、産業資本であれ商業資本であれ、資本として機能することによって、20ポンドの利潤を生産する。資本機能としての不可欠の条件は、貨幣が資本として支出されることだ。Bは、自分の資本でなく、Aの資本を支出する。しかし、BはAの同意なしにAの資本を支出することはできない。だから、最初に100ポンドを資本として支出するのはAである。この100ポンドに関する限りでは、Bが資本家として機能するのは、Aが100ポンドをBに委託し、100ポンドを資本として支出するからだ。

【2】利子生み資本の独特な流通 [7]～[16]

(1)利子生み資本の貨幣の運動は、 $G - G - W - G' - G'$ である

(2)資本としての貨幣の二重の支出には、二重の貨幣の還流が対応する。貨幣は、運動の中から、 $G + \Delta G$ としてBに還流する。次に、Bは再び $G + \Delta G$ (利子)をAに移転する。

[7]利子生み資本の販売は、譲渡されるのではなく貸し付けられるのだ

はじめに、利子生み資本[Das zinstragende Kapital]※(5)の独特な流通を考察しよう。次に、利子生み資本が商品として販売される独自の仕方、すなわち、譲渡されるのではなく貸し付けられるという仕方が研究されなければならない。

※(5) 21章～24章で考察する「利子生み資本[Das zinstragende Kapital]」とは何か？

ここで、初めて「利子生み資本」という用語が登場する。貸し手の貨幣は、 $G - G'(G + \Delta G)$ という変態をする。一定期間の単なる貨幣の手放しおよび貨幣の返還によって価値が量的に増大する。このような資本、手放し・還流という運動だけによって増殖する資本が「利子生み資本」である。また、貸付・返済という形態で運動するという点に着目して、「貸付資本」とも呼ぶ。貨幣市場が人々が貨幣資本[monied capital]と呼んでいるのは、この利子生み資本の具体的な形態なのである。5篇21章～24章までは、資本のもとでの信用制度を捨象した「利子生み資本そのもの」が論じられ、25章～35章では、利子生み資本が信用制度のもとでとる具体的形態である「貨幣資本[monied capital]」が論じられている。

[8]通常形態での利子生み資本のみを問題にする(担保付き形態は捨象)

出発点は、AがBに前貸しする貨幣である。この貸付は、担保付きまたは無担保で行われる。{とは言え、担保付という形態※(6)は、商品を担保として、あるいは手形等々のような債務証書を担保として行われる前貸の場合を別とすれば、より古風な形態である。これらの特殊な諸形態[Diese besondren Formen]は、ここでは、われわれに関係がない。ここで問題にするのは、通常形態での利子生み資本[zinstragenden Kapital in seiner gewöhnlichen Form]※(7)である。

※(6)利子生み資本の担保付前貸の形態は、学生時代は身近な存在であった

個人的な体験談になるが、『資本論』を読む以前から「利子生み資本の担保付前貸形態」は、私にとって身近な存在であった。生活費に困ると、たった一つの貴重品である愛用のカメラを担保(質流れ期間は3週間だったと記憶している)に、学生寮近くの「質屋」に通ったものだった。60年以上経った今でも、質屋の主人の顔とペトリV6F2を懐かしく思い出す。

※(7)「通常形態での利子生み資本」とは？

マルクスの言う「通常形態での利子生み資本」とは、どのような利子生み資本を言うのか。利子生み資本の貸付には、「担保貸付」と「無担保貸付」とがある。「担保貸付」(商品や手形・債務証書の担保を除く)は古風な形態であるとも言っている。すなわち、「通常形態での利子生み資本」とは、貴重品、家屋、工場など

を担保に貸し付ける古風な形態ではなく、今日通常に行われている「商品や手形・債務証書の担保による」貸付のことをいうのである。

[9]貨幣はBによって資本に転化され、 $G-W-G'$ を経て、 $G+\angle G$ (利子)としてAに復帰する

B の手中で貨幣は現実には資本に転化され、運動 $G-W-G'$ を経過し、 $G+\angle G$ ($\angle G$ =利子)として A に復帰する。簡単にするために、資本が長期間 B の手中に留まって利子が期間ごとに支払われる場合を度外視する。

[10-11]利子生み資本の貨幣の運動は、 $G-G-W-G'-G'$ である

この貨幣の運動は、 $G-G-W-G'-G'$ である。重複して現れるのは、①資本としての貨幣の支出、②実現された資本としての、 G' または $G+\angle G$ としての貨幣の還流である。

[12]商業資本の運動 $G-W-G'$ は、おなじ商品の場所変換を示している

商業資本の運動 $G-W-G'$ では、おなじ商品が2度、あるいは商人が商人に売の場合は何度も持ち手を変える。だが、おなじ商品の場所変換は、その商品の一つの変態（購買または販売）を示していて、商品が最終的に消費に入り込むまで、この過程が何度繰り返されようとも変わらない。

[13] $W-G-W$ では、同じ貨幣の場所変換が、商品の完全な変態を示している

他方、 $W-G-W$ では、同じ貨幣の2度の場所変換が生じる。だが、同じ貨幣の場所変換は、商品の完全な変態を示している。商品はまず貨幣に転化され、次に貨幣から再び他の一商品に転化される。

[14]利子生み資本の $G-G$ の場所変換は、AからBへの貨幣の移転以外のなにものでもない

これに対して、利子生み資本の場合には、 G の第1の場所変換は、決して、商品の変態の契機でもなければ、資本の再生産の契機でもない。 G がこのような契機となるのは、やっと第2の支出においてであり、 G によって商業を営むか、またはそれを生産資本に転化させるかする機能資本家の手中においてである。 G の第1の場所変換は、ここでは、A から B への貨幣の移転または引き渡し——一定の法律的な諸形態と諸条件とのもとで行われるのを常とする——以外のなにものをも表現しない。

[15]資本としての貨幣の二重の支出には、二重の貨幣の還流が対応する。貨幣は、運動の中から、 $G+\angle G$ としてBに還流する。次に、Bは再び $G+\angle G$ をAに移転する。

資本としての貨幣の二重の支出には、二重の貨幣の還流が対応する。貨幣は、運動の中から、 $G+\angle G$ として B に還流する。次に、B は再び $G+\angle G$ を A に移転する。この場合、 $\angle G$ は全利潤に等しいのではなく、利子の一部である利子でしかない。貨幣が B に還流するのは、B が A の所有物である貨幣を機能資本として支出したからである。だから、貨幣の還流が完了するためには、B が再び貨幣を A に移転しなければならない。ただし、B は、資本額の他に、利潤の一部である利子を A に渡さなければならない。なぜなら、A が B に貨幣を貸したのは、資本として、すなわちその運動の中で自己を維持するだけでなく、剰余価値を創造する価値として、B に貸したのである。貨幣は機能資本である限り B の手中に留まる。貨幣は B への還流とともに資本と

しての機能を止める。貨幣は、もはや機能しない資本として再び A に返還されなければならない。

[16]貸し付けるという形態は、貨幣が商品になるという規定から生じる

この商品にとって、すなわち商品としての資本にとって特有なものである貸し付けるという形態は、資本が商品として登場する規定、または貨幣が商品になるという規定から生じる。

[3] 流通過程における商品資本・貨幣資本 [17]～[22]

- (1) 商品資本が単純な商品から区別される 2 つの理由。①商品が剰余価値を含んでおり、剰余価値を実現すること。②商品が、商品資本の資本としての再生産過程の一契機であること。
(2) 資本は流通過程においては、資本としてではなく、商品または貨幣としてのみ現れる。

[17-18]商品資本および貨幣資本の形態において、資本は資本として商品になるのではない

次のことを区別しなければならない。資本は、流通過程では、商品資本および貨幣資本として機能する。だが、商品資本および貨幣資本の形態において、資本は資本として商品になるのではない。

[19]商品資本が単純な商品から区別される2つの理由。①商品は剰余価値を含んでおり、剰余価値を実現すること。②商品は、商品資本の資本としての再生産過程の一契機であること

流通過程では、商品資本は商品としてのみ機能し、資本としては機能しない。商品資本が単純な商品から区別される商品資本であるのは、次の理由による。①商品が剰余価値を身ごもっており、価値の実現が同時に剰余価値の実現でもあるということ。②商品資本の商品としてのこの機能〔=剰余価値の実現〕は、商品資本の資本としての再生産過程の一契機であり、同時に商品資本の資本としての運動でもあるということ。ただし、この運動〔商品資本の商品としての〕がそうなるのは、販売という行為によってではなく、この行為と、この価値額の資本としての総運動との間の関連によってのみである。

[20]貨幣資本であるのは、購買という行為から生じるのではなく、この行為と資本の総運動との連関から生じてくる

同様に、流通過程では、貨幣資本は単純に貨幣として、商品（生産諸要素）の購買手段として作用するだけだ。この貨幣が、同時に資本の一形態である貨幣資本であるということは、貨幣資本が貨幣として果たす現実の機能〔購買という行為〕から生じるのではなく、この行為と資本の総運動との連関から生じてくる。なぜなら、貨幣資本が貨幣として果たすこの行為が、資本主義的生産過程を導入するからだ。

[21]商品資本と貨幣資本が流通過程で役割を果たす限りでは、商品資本は商品としてのみ、貨幣資本は貨幣としてのみ作用する

商品資本と貨幣資本が現実に関し、流通過程で役割〔販売と購買〕を果たす限りでは、商品資本は商品としてのみ、貨幣資本は貨幣としてのみ作用する。それだけを考察すれば、変態のこの契機のいずれにおいても、資本家は商品を資本として買い手に売るのではなく、または、貨幣を資本として売り手に譲渡するのではない。どちらの場合も、資本家は、商品を単純に商品と

して譲渡し、貨幣を単純に貨幣として譲渡する。

[22]資本は流通過程においては、資本としてではなく、商品または貨幣としてのみ現れる

資本が流通過程において資本として登場するのは、全経過の連関においてのみであり、出発点が同時に復帰点として現れる契機としてのみ、 $G - G'$ または $W - W'$ においてのみである。だが、復帰の契機においては、媒介 [=生産過程における剰余価値の生産] が消滅している。そこにあるのは、 $G'(G+G)$ であり、前貸しされた貨幣額プラス実現された剰余価値に等しい価値額である。この資本が再び支出されるときには、資本として第三者に譲渡されるのではなく、単純な商品として第三者に販売されるか、または、単純な貨幣として商品と引き換えに第三者に交付される。資本は流通過程においては、資本としてではなく、商品または貨幣としてのみ現れる。現実の運動において、資本が資本として存在するのは、流通過程においてではなく、生産過程すなわち労働力の搾取過程においてのみである。

[4] 利子生み資本の独自な性格 [23]～[28]

- (1)利子生み資本においては、貨幣は、一定期間後に、剰余価値を伴って復帰するという条件で、譲渡される。
- (2)利子生み資本では、媒介的な中間運動なしに資本が貨幣を生む貨幣として登場する

[23]貨幣は、一定期間後に、剰余価値を伴って復帰するという条件で、譲渡される

だが、利子生み資本においては事情が異なる。自分の貨幣を利子生み資本として増殖しようとする貨幣所有者は、貨幣を第三者に譲渡し、それを流通に投げ入れ、それを資本としての商品にする※(8)。貨幣は、資本として、剰余価値を創造する使用価値をもつ価値として、第三者に引き渡される。つまり、貨幣はある期間だけ所有者から遠ざかるのであり、一時的にのみ貨幣所有者の占有から機能資本家の占有に移るのである。貨幣は、支払われてしまうのでも売り渡されるのでもなく、ただ貸し付けられるのである。すなわち、貨幣は、一定期間後に、第1に、その出発点に復帰するという条件で、第2に、剰余価値を伴って復帰するという条件のもとで、譲渡される。

※(8)貨幣が、「資本として機能する使用価値」をもつようになったのはいつからか？

ここでは、貨幣は、一般的等価物として機能するという属性に加えて、さらに、資本として機能し、平均利潤を生むことができる、という性質をもっていることになる。だが、「貨幣」は、それが成立したときからすぐに「資本として機能する商品」としての可能性または力量を持っていたわけではない。それでは、いったい、いつからこのような使用価値をもつことになるのであろうか。

それは、生産が資本主義的に行われるようになってからである。資本主義的生産様式のもとで初めて、貨幣がそうした使用価値をもつようになる。貨幣が、したがってまたはそれによって買われる生産手段が資本として機能し剰余価値を生むことができるのは、生産手段から切り離された労働が賃労働としてそれらに対立している状態が、要するに、資本主義的生産関係が存続しているからであり、資本の所有とは労働と生産手段の分離を表現するものである。このことが、貨幣に他人の労働に対する指揮権を与え、剰余労働を取得することを可能にし、こうして貨幣を、資本としての属性において、商品にする。これが、利子生み資本という独自な資本形態を生み出すのである。

[24(注1)]資本として貸し付けられる商品は、固定資本または流動資本として貸付られる

資本として貸し付けられる商品は、その性状に応じて、固定資本または流動資本として貸付られる。貨幣は、どちらの形態でも貸し付けられることができる。だが、全ての貸し付けられた資本は、その形態がどのようなものであれ、常に貨幣資本の一特殊形態にすぎない。なぜなら、貸し付けられるものは、常に一定の貨幣額であり、この額に対して利子が計算されるからだ。貸し出されるものが貨幣でも流動資本でもない場合は、それは固定資本が還流するのと同じ方法で返済される。貸し手は、周期的に、利子と、固定資本自体の消費された価値部分とを受け取る。期限の終わりには、貸し付けられた固定資本の消費されなかった部分が“現物で”復帰する。

[25(注2)]貸し付けられた資本にとっては、還流は返済という形態を取る

貸し付けられた資本の還流の仕方は、自己を再生産する資本の、現実の循環運動によって規定されている。ただし、貸し付けられた資本にとっては、その還流は返済※(9)という形態を取る。なぜなら、前貸、すなわちこの資本の譲渡が、貸付※(9)という形態を取るからである。

※(9)「資本としての貨幣」の「時間極めの売買」は貸付と返済という形態をとる

「貨幣」という商品は、普通の商品のように、対価と引き換えにそれを相手に手渡した終わり、という仕方で売られることはできない。「貨幣」を買う人が、それがもつ資本として機能する力能を、つまりその「使用価値」を消費するのは、それを資本として機能させること、それを資本として投下したのち、利潤と共に回収することによってである。だから、資本という「使用価値」とは、利潤を入手できるという「使用価値」なのである。貨幣を資本として機能させて利潤を取得するには一定の時間が必要である。だから、「貨幣」という「商品」は、売り手がこの貨幣を一定期間買い手の手に委ねておき、期間が終われば買い手がそれを売り手に返す、という仕方で売られるほかはない。これはまさに「時間極めでの商品の売買」にほかならない（大谷「利子生み資本論」① 163ページ）。

[26(注3)]本章では、本来の貨幣資本だけを取り扱う

この章〔21 章〕では、本来の貨幣資本——貸し付けられた資本の他の諸形態はこれから派生している——だけを取り扱う〔この項目でわれわれが取り扱うのはただ本来の貨幣資本だけであって、そのほかの貸付資本の諸形態はこの貨幣資本から派生したものである←草稿〕※(10)。

※(10)「本来の貨幣資本だけを取り扱う」とは？

マルクスがここで取り扱う貸付資本とは何か？ それは、「本来の貨幣資本だけ」であると言っている。つまり、この項目で取り扱う貸付資本は貨幣形態にある資本だけであり、商品形態にある資本（たとえば、工場、船舶、ドック、家屋など）は考察の対象から除外するということである。これは、マルクスの論理展開からすれば、当然の方法である。商品形態にある資本はすべて貨幣形態の資本の派生形態であり、貸付資本を貨幣形態だけに絞って考察することで、貸付資本の純粋な特徴が浮かび出てくるのである。

[27(注4)]貸し出された資本は二重に還流する（最初は機能資本家に、次に貨幣資本家に復帰）

貸し出された資本は二重に還流する。それは、再生産過程の中で機能資本家のもとに復帰し、次に、貸し手である貨幣資本家※(11)のもとへ復帰する。すなわち、貸し出された貨幣資本は、機能資本家のもとに復帰し、さらに資本の本当の所有者、資本の法律上の出発点への〔資本の〕返済として、もう一度復帰が繰り返される。

※(11)貨幣資本家と機能資本家による利潤（剰余価値）の分割

貨幣資本家とは貨幣資本の貸し手であり、機能資本家とは貨幣資本の借り手である。借入資本を機能させる

機能資本家が取得した利潤のすべてが機能資本家のものになるのではない。その利潤から借入資本に対する利子を貨幣資本家に支払われるのだ。だから、総利潤は機能資本家の取り分である企業利得と、貨幣資本家の取り分である利子とに分割される。利子率が変動すれば、この分割の比率も変化する。この利子率は、貸付可能な貨幣資本の量（供給）と貨幣を借り入れようとする部分の大きさ（需要）との関係によって決まる。だから、企業利得と利子との分割は、利潤の量的分割でしかない（この「企業利得と利子との分割」は次章で考察されている）。

【28(注5)】

①流通過程では、資本は商品または貨幣として現れ、資本の運動は購買と販売とに帰着する

現実の流通過程では、資本は常に商品または貨幣としてのみ現れ、資本の運動は購買と販売とに帰着する。要するに、流通過程は商品の変態に帰着する。だが、再生産過程の全体を考察する場合は、事情が異なる。貨幣から出発すれば、ある貨幣額が支出され、一定期間後に増加分を伴って復帰する。この貨幣額は、一定の循環運動を通過する中で、自己を維持し、増殖した。

②貨幣が、資本として貸し付けられるかぎりでは、資本として支出される

だが、貨幣が資本として貸し付けられるかぎりでは、貨幣は、自己を維持し自己を増殖する貨幣額として貸し出されるのである。それは、貨幣として支出されるのでも商品として支出されるのでもなく、また商品として前貸しされる場合にも、貨幣と引き換えに販売されるのではない。それは、資本として支出されるのである。

③利子生み資本では、媒介的な中間運動なしに資本が貨幣を生む貨幣として登場する

自己自身との関係——資本主義的生産過程を全体および統一体としてとらえれば、資本がそうしたものとして自己を示し、そこで資本が貨幣を生む貨幣として登場する関係——が、ここでは媒介的な中間運動なしに、単純にその性格として、その規定性として、それに合体される。〔それが、貨幣資本として貸し付けられる場合には、〕それはこの規定性において譲渡される。

【5】プルードン「利子論」への批判 [29]～[33]

(1)プルードンは、資本一般の運動を利子生み資本に固有な運動としている

(2)プルードンが説明できないことは、①販売、価格、対象の譲渡という諸カテゴリー、②剰余価値が現れる無媒介的形態、である

[29]プルードン「利子論」(1)

①プルードン「利子付きの貸付は、所有権を譲渡せずに、利子を受け取る能力である」

プルードンにとっては、貸し付けは、それが販売ではないという理由から邪悪なことに思われるのだ。「利子を取っての貸付は、売る物の所有権を譲渡せず、同じ対象を再び販売し、いつも再びその代価を受け取る能力である」(プルードン『信用の無償性』)※(12)。

②再生産過程の全体においては、産業資本家は、再生産過程の中で同じ価値（剰余価値を別とすれば）を自己の手中に保持するのであり、この価値の形態が変わるだけである

対象である貨幣、家屋などは、売買の場合のように、所有者を変えることはない。だが、プルードンは、貨幣が利子生み資本の形態で手放される場合は、それに対する何らの等価物も受け取らないということを見ない。どの売買行為でも、交換が行われる限り、売買された対象の所有権は常に譲渡される。だが、価値は手放されない。販売の場合、商品は手放されるが商品の価値は手放されない。商品の価値は貨幣の形態で戻される。購買の場合、貨幣は手放されるが貨幣の価

値は手放されない。貨幣の価値は商品商品の形態で補填される。産業資本家は、再生産過程全体を通じて同じ価値（剰余価値を別とすれば）を自己の手中に保持するのであり、この価値の形態が変わるだけである。

※(12)マルクスのプルードン批判

マルクスとエンゲルスは、プルードンの小ブルジョア性とその諸説の俗学性と共に痛烈な批判を加えた。『資本論』では、プルードンが資本主義秩序の変革、社会主義の実現を唱えながら、その理論的基礎たる経済学的見解では、全く俗流学説の模倣に墮しているという矛盾が鋭く摘出されている。主要なものを挙げてみよう。

- ①資本主義的所有に対して否定的態度を示しながら、商品生産に対応する法的関係としての所有を永久化しようとする誤った見解。
- ②商品価値を費用価格に帰着させる俗学的見解にもとづく「人民銀行」の妄想。
- ③商品価値や資本についての根本的無理解から生じる、貸付資本の役割や利子の本質に関する混乱した見解。
- ④資本主義的生産と信用制度との関係に対する完全な誤解の上に構想された「無償信用」の幻想性。
- ⑤労働生産物の価格は、労働者は労賃では自分の生産物を買戻しえないのだと言って、資本主義的害悪の根源は利子にあるとする奇妙な主張。

[30]貸付貨幣資本家の利子は、資本の総循環過程に依拠し、この過程から発生する

交換、すなわち諸対象の交換が行われる限りでは、価値変動は起こらない。同じ資本家はいつも同じ価値を手中に保持する。だが、剰余価値が資本家によって生産される限りでは、交換が行われない。交換が行われるときには、剰余価値はすでに諸商品の中に潜んでいる。資本の総循環を考察すれば、常に、一定の価値額が前貸しされ、この価値額に剰余価値をプラスしたものが流通から回収される。この過程の媒介は、単なる交換行為の中では目に見えない。貸付貨幣資本家の利子は、資本としてのGのこの過程に依拠し、この過程から発生するのである。

[31]プルードン「利子論」(2)

①プルードン「貸付資本家は、交換に投じる価値だけでなく利子をも受け取る」

プルードンは言う。「帽子製造業者は帽子を売って、帽子の価値を受け取るのであり、帽子の価値より多くも少なくも受け取りはしない。しかし、貸付資本家は、彼の資本の全額を受け取るだけではない。彼は、交換に投じるよりも多く〔の価値〕を手に入れる。彼は資本の他に利子を受け取るからだ」。

②〔利子の支払い〕帽子の価値を何も変えずに、剰余価値の配分を変えるだけである

ここでは、帽子製造業者は貸付資本家に対立して生産的資本家を代表している。100個の帽子の生産価格が115ポンドであり、この生産価格が帽子の価値に等しいと仮定する。利潤=15%とすれば、帽子製造業者は、それらの商品を価値どおりに115ポンドで売ることによって、15ポンドの利潤を実現する。彼が商品に費やせる費用は100ポンドにすぎない。もし自分自身の資本だけで生産したとすると、彼は超過分15ポンドをそっくりポケットに入れる。もし借入資本で生産したのであれば、彼はそのうちの5ポンドを利子として引き渡さなければならない。〔利子の支払い〕帽子の価値を何も変えずに、その価値の中に潜んでいる剰余価値の、様々な人物の間での配分を変えるだけである。このように、帽子の価値は利子の支払いによって影響されないのだ。

[原注56]ルターはプルードンよりはいくらか水準が高い

ルターはプルードンよりはいくらか水準が高い。彼は、金儲けが貸付または購買の形態とはか

かわりのないことをすでに知っていた——「高利は取引からも生じる。しかし、今これを一口で片づけてしまうには多過ぎる。私たちは、今は一つだけ、すなわち、貸付における高利についてだけ扱って、これを防止した後に、取引の高利に対しても厳しくところと思う」(ルター)。

[32]ブルードンは、資本一般の運動を利子生み資本に固有な運動としている

ブルードンがどんなに資本の一般的運動について理解していなかったかは、彼が資本一般の運動を利子生み資本に固有な運動として記述している次の文章に示されている——「利子の蓄積のために、貨幣資本は、交換のたびにいつもその源泉に復帰するのであるから、いつも同じ人の手によってなされる再貸付は、いつも同じ人物に利得をもたらす結果になる」(ブルードン)。

[33]ブルードンを当惑させているもの→①販売、価格、対象の譲渡という範疇、②剰余価値が現れる外面的・無媒介的形態、である

それでは、利子生み資本の特有の運動のなかでブルードンを当惑させているものは何か？〔ブルードンにとって説明のつかない点は何であろうか？←E〕

それは、売る[vendre]、価格[prix]、対象を譲渡する[ceder des objets]、という範疇であり、また、ここでは剰余価値が現れている外面的で無媒介的な形態である。要するに[in fact]、ここでは資本としての資本が商品となってしまうという現象、それゆえ、売ること[vendre]が貸すことに転化し、価格[prix]が剰余価値の分け前に転化してしまっているという現象である。

【6】利子生み資本独自の運動形態 [34]～[40]

(1)利子生み資本の運動は、貨幣または商品の条件付きの譲渡という独自形態の運動である。

(2)利子生み資本が経過する全運動は、 $G - G'$ である。

[34]貸付資本の現実の運動と法律上の取引

①利子生み資本の特徴をなすのは、媒介する循環から切り離された復帰の形態である

資本のその出発点への復帰は、一般に、資本が総過程の中で行う特徴的な運動である。それ〔資本の出発点への復帰〕は、利子生み資本だけの運動ではない。利子生み資本の特徴をなすのは、媒介する循環から切り離された復帰の形態である。貸付資本家は、等価物を受け取らずに彼の資本を手放し、これ〔貸付資本家の資本〕を産業資本家に移転する。貸付資本家が資本を手放すのは、資本の現実的な循環過程の行為ではなく、産業資本家によって達成されるべきこの循環〔現実の循環〕を導入するものでしかない。

②利子生み資本の第1の場所変換は、どんな変態の行為(購買・販売)も表さない

利子生み資本の第1の場所変換〔貨幣資本家から産業資本家への貨幣の貸付〕は、どんな変態の行為も、すなわち購買も販売も表さない。所有権は譲渡されない。なぜなら、どんな交換も行われず、どんな等価物も取らないからだ。産業資本家から貸付資本家への貨幣の復帰は、単に資本を手放す第1の行為を補完するものでしかない。貨幣形態で前貸しされた資本は、循環過程を経て、産業資本家のもとに再び貨幣形態で復帰する。だが、この資本は支出の際に彼のものでなかったのだから、復帰の際にも彼のものではありません。彼は資本を貸し手に返還しなければならない。

③貸し付けられた資本の出発点と復帰点は、資本の現実的運動の前と後に行われて、現実的運動そのものとは何のかかわりのない、法律上の取引に媒介された任意の運動として現れる

資本を貸し手の手から借り手の手に移転する第1の引き渡しは、一つの法律上の取引であって、この取引は、資本の現実の再生産過程とは何のかかわりもなく、ただ、現実の再生産過程を導入するものでしかない。還流した資本を資本の借り手から再び貸し手の手に移転する返済は、第2の法律上の取引であり、第1の法律上の取引の補完である。したがって、貸し付けられた資本の出発点と復帰点、手放しと返済とは、資本の現実的運動の前と後に行われて、この〔現実的〕運動そのものとは何のかかわりもない、法律上の取引に媒介された任意の運動として現れる。

[35]利子生み資本の運動は、貨幣または商品の条件付きの譲渡という独自形態の運動である

第1の導入行為では、貸し手は彼の資本を借り手に手放す。第2の補足的終結行為では、借り手が貸し手に返済する。貸し手と借り手の間における、貸し付けられた資本そのものの運動を問題にする限りでは、これら2つの行為が、この運動の全部を包括する。この運動——返還を条件とする手放し——は、貸付および借り入れの運動、すなわち、貨幣または商品の条件付きの譲渡というこの独自の形態の運動である。

[36]一定期間にわたる貨幣の貸付と利子を伴う貨幣の回収が、利子生み資本の運動形態である

資本一般の特徴的な運動——貨幣の資本家のもとへの復帰、資本のその出発点への復帰——は、利子生み資本においては、現実の運動から切り離されて、全く外面的な姿態を受け取る。Aは彼の貨幣を、貨幣としてではなく、資本として手放す。ここでは資本〔貨幣←草稿〕は何の変化も生じない。それは持ち手を替えるにすぎない。貨幣の資本への現実の転化は、Bの手中で初めて遂行される。だが、Aにとっては、貨幣は、Bに対して手放されただけで資本になっている。生産過程および流通過程からの資本の還流は、Bにとってのみ生じる。Aにとっては、貨幣の還流は譲渡と同じ形態で生じる。資本は、Bの手からAの手に再び復帰する。一定期間にわたる貨幣の貸付と利子(剰余価値)を伴うこの貨幣の回収、これが利子生み資本にふさわしい運動の全形態である。貸し付けられた貨幣の資本としての現実の運動は、貸し手と借り手との間の諸取引の外部にある操作である。これらの取引そのものにおいては、この〔現実の運動の〕媒介は消え失せており、目に見えないし、直接にそこに含まれていない。資本の単なる形態——金額Aとして手放され、一定期間内に、何の他の媒介もなしに、金額 $A + 1/x A$ として復帰する貨幣——は、現実の資本運動の没概念的な形態[begriffslose Form]※(13)でしかない。

※(13)没概念的形態[begriffslose Form]とは？

「新版資本論」の訳語である「没概念的な形態」の独語は、「begriffslose Form」である。begriff[男]は概念、観念、表象などの意味であり、「-los」は(名詞に付けて)「～がない」を意味する形容詞をつくる語尾である。辞書的に直訳すると、「begriffslose Form」は「概念のない形態」の意味である。素直に訳せば、「没概念的形態」より「無内容な形態」のほうが自然な訳し方だと思う。なぜ、利子生み資本の全運動(一定期間にわたる貨幣の貸付と利子(剰余価値)を伴うこの貨幣の回収)が「無内容な形態」であるかは、「現実の運動の媒介は消え失せており、目に見えないし、直接にそこに含まれていない」からである。つまり、現実資本の運動(価値を増殖し、剰余価値を生み出す運動)の外部に存在する内容のない運動であるからだ。

[37]利子生み資本の場合は、手放しと返済の間に行われることは、全て消え去っている

資本の現実の運動においては、復帰は流通過程の一契機である。最初に、貨幣が生産諸手段に転化される。生産過程がそれを商品に転化する。商品の販売によって、それは貨幣に再転化され、この形態で、資本を最初に貨幣形態で前貸した資本家の手もとに復帰する。だが、利子生み資本

の場合には、復帰も手放しも、資本の所有者と第二の人物との間の法律的な取引の結果にすぎない。目に見えるのは手放しと返済だけである〔したがってまた、貨幣資本家[monied capitalist]と生産資本家との間の関係にかんする限り、それはただ、貨幣の貸付(貨幣の手放し、譲渡)と借りられた貨幣の返済(その還流)として現れるだけである←草稿〕。手放しと返済の間に行われることは、全て消え去っている。

〔訳注〕マルクスは「貨幣資本」「貨幣資本家」という用語を使い始める

マルクスは、このあたりから、利子生み資本として登場する貨幣資本およびその所有者を表現する用語として、「貨幣資本(マニドキャピタル)」および「貨幣資本家(マニドキャピタリスト)」という用語を使いはじめ、その用語法は、ごく一部の例外を除き、第21章から第36章まで一貫している。これは、資本の循環の一形態である「貨幣資本(ゲルトカピタル)」と区別するためであった。

エンゲルスは、この部分の編集にあたって、「貨幣資本(マニドキャピタル)」の用語を、すべて「貨幣資本(ゲルトカピタル)」あるいは「貸付資本(ライカピタル)」に置き換え、ときには、「貨幣資本(ゲルトカピタル)」の言葉に「貸付可能な」などの形容詞を付けて、利子生み資本としての性格を表そうとした。エンゲルスのこの用語法では、資本の循環の一形態としての「貨幣資本(ゲルトカピタル)」と利子生み資本としての「貨幣資本(マニドキャピタル)」との区別がはっきりしない。また、「貸付資本(ライカピタル)」は、マルクスが一度も使ったことのない言葉である。草稿には、「貸付可能な資本」という用語はあるが、エンゲルスは、その多くを「貸付資本」に置き換えている。

本訳書では、第5篇のこのページ以後の部分で、マルクスが草稿で「貨幣資本(ゲルトカピタル)」と書いている場合は、ルビを付けて、そのことを示した。ルビのない「貨幣資本」あるいは「貨幣資本家」は、全て、草稿で「マニド・キャピタル」あるいは「マニド・キャピタリスト」である。ただ、初出の場合と、「ゲルトカピタル」との対比が特に問題となっている場合には、「マニドキャピタル」のルビを付けた。また、「貸付資本」の場合には、草稿で(1)「マニドキャピタル」の場合、(2)「貸付可能な資本」の場合、(3)草稿に対応する言葉がなく、エンゲルスが挿入した場合があるが、(2と(3)の場合だけ、これを訳注で示した。

〔※小西一雄氏は「monied capital」の日本語訳を「貸付貨幣資本」としている。“貨幣形態にある貸付資本”の意味をもたせているのであろう。私のレポートでは、ルビを付けると小さい文字で読みにくくなるので、次のように表記する。「monied capital」→貨幣資本(m)、「monied capitalist」→貨幣資本家(m)、「Geld Capital」→貨幣資本。〕

[38]貨幣資本家が貨幣を資本として手放すのは、貨幣が資本として使用された後に自己の出発点に還流するからである

貨幣として前貸しされた貨幣には、貨幣を前貸した人、貨幣を資本として支出した人のもとに復帰するという属性があるから、貨幣所有者は、貨幣を資本として貸し付けることができるのである。彼が貨幣を資本として手放すのは、貨幣が資本として使用された後に自己の出発点に還流するからであり、貨幣が借り手自信のもとに還流するからこそ一定期間のちは借り手によって返済されうるからである。

[39]資本としての貸付は、貨幣が現実の資本として使用され、自己の出発点に復帰することを前提とする

資本としての貸付——一定期間後の返済を条件とする貨幣の手放し——は、貨幣が現実の資本として使用され、現実的に自己の出発点に復帰することを前提とする。資本としての貨幣の現実の循環運動は、法律上の取引——借り手は貸し手に貨幣を返済しなければならない——の前提であ

る。借り手が貨幣を資本として投下しないとしても、それは借り手が決める事柄である。貸し手は貨幣を資本として貸し付けるのであり、貨幣は、資本として資本諸機能を果たさなければならないのであって、これらの諸機能は、貨幣形態でその出発点に還流するまでの貨幣資本の循環を含んでいる。

【40】利子生み資本が経過する全運動は、 $G - G'$ である

資本が貨幣または商品として機能する流通行為 $G - W$ および $W - G'$ は、この資本の総運動の媒介的諸過程、総運動の個別的諸契機であるにすぎない。この価値額が資本として経過する全運動は、 $G - G'$ である。それは、貨幣が前貸しされ、貨幣として復帰する。貨幣の貸し手は、貨幣を商品の購入には支出せず、また、価値額が商品の形態で存在する場合には、その価値額を売って貨幣に換えることはせず、それを資本として、 $G - G'$ として、一定期限後に再び出発点に復帰する価値として、前貸しする。売ったり買ったりするのではなく、彼は貸し付ける。したがって、この貸付は、貨幣を貨幣または商品としてではなく資本として譲渡するのにふさわしい形態である。

【7】利子の研究 [41]～[63]

- (1) 貨幣資本家と生産的資本家の間で支払われるものは、商品の価格ではなく利子である
- (2) 利子は貨幣資本の価値増殖を表現し、貸し手に支払われる価格として現れる

【41-42】 ΔG は利子であり、機能資本家の手中に留まらずに貨幣資本家のものとなる部分である

これまでの、貸し付けられた資本が、その持ち主と産業資本家とのあいだで行う運動だけを考察してきた。次に、利子を研究する。貸し手は貨幣を資本として支出する。彼が他人に譲渡する商品は資本であり、従って彼のもとに還流する。だが、彼のもとへの単なる復帰は、資本としての貸付価値額の還流ではなく、貸し付けられた価値額の単なる返還であろう。資本として還流するためには、前貸価値額は、自己を増殖しなければならない、したがって、剰余価値を伴って復帰しなければならない。この場合の ΔG は利子、すなわち、平均利潤のうち、機能資本家の手中に留まらずに貨幣資本家のものとなる部分である。

【43】貨幣資本家によって、貨幣が資本として譲渡されるならば、貨幣が $G + \Delta G$ として貨幣資本家に返済されなければならない

貨幣が資本として貨幣資本家によって譲渡されるということは、貨幣が $G + \Delta G$ として彼に返済されなければならないことを意味する。その間に、利子が期限ごとに還流するが、資本は還流せず、長い期間の終わりに資本の返済が行われるという形態については、あとで個別に考察されなければならない。

【44-45】貨幣資本家が産業資本家に何を譲渡するのか？ この譲渡の行為だけが貨幣の貸付を資本としての貨幣の譲渡、商品としての資本の譲渡にするのである

貨幣資本家は、借り手である産業資本家に何を与えるのか？ 前者は後者に何を譲渡するのか？ この譲渡の行為だけが貨幣の貸付を資本としての貨幣の譲渡、すなわち、商品としての資本の譲渡にするのである。資本が貨幣の貸し手によって商品として手放されるのは、この譲渡という経過を通してだけである。

[46]通常の販売では、売り手が譲渡するものは商品の使用価値(使用価値としての商品)である。通常の販売の場合、何が譲渡されるのか？ 販売される商品の価値ではない。なぜなら、個の価値は形態を変えるにすぎないからだ。同じ価値と同じ価値の大きさとが、ここでは形態を変えるだけだ。売り手によって現実譲渡されるものは、商品の使用価値であり、使用価値としての商品である。

[47]貨幣資本家が生産的資本家に譲渡する商品の使用価値とは、資本として機能することができる使用価値(資本としての商品)である

貨幣資本家が、生産的資本家に譲渡する使用価値とは何か？ それは、貨幣が資本に転化され、資本として機能することができるという貨幣の使用価値、したがって、貨幣がその運動の中で、価値の大きさを保持するほかに、一定の剰余価値、平均利潤を生産することによって、貨幣が受け取る使用価値である。〔他の商品の場合、最後の入手者の手中で使用価値は消費され、それと同時に商品の実体、それとともにその価値も、消滅する。これに反して、資本という商品は、その使用価値の消費によって、その価値および使用価値が維持されるだけでなく、増加されるという独自性をもっている← E の挿入〕。

[48]貨幣資本家は産業資本家に、資本としての貨幣の使用価値を一定期間譲渡する

資本としての貨幣の使用価値——平均利潤を生み出す能力——を、貨幣資本家は産業資本家に一定期間譲渡し、この期間中、貨幣資本家は貸し付けた処分権を産業資本家に引き渡す。

[49]貸し付けられた貨幣資本の使用価値は、価値を増加させる能力として現れる

貸し付けられた貨幣は、産業資本家に対する立場という点で、労働能力とある類似性をもっている。違いは、産業資本家は、〔労働者に対しては〕労働力の価値を支払うが、〔貨幣資本家に対しては〕貸し付けられた資本の価値を単に返済することだけだ。産業資本家にとって、労働力の使用価値は、労働力そのものが有するよりも大きな価値(利潤)をその消費中に作り出す、ということである。価値のこの超過分が、産業資本家にとっての労働力の使用価値である。同様に、貸し付けられた貨幣資本の使用価値も、価値を生みかつ増加させるその能力として現れる。

[50]単純商品と貨幣商品の販売の相違点

①単純な商品の場合、同じ価値が買い手と売り手の手中に留まり、形態だけが異なる。貨幣商品の場合、一方の側のみが価値を手放し、一方の側によってのみ価値が受け取られる。

②単純な商品の場合、使用価値は個人的に消費されて消滅する。貨幣商品の場合、使用価値は最初の価値を超える超過分(利潤)を生み出す。

貨幣資本家は、一つの使用価値を譲渡する。彼の貨幣は商品として手放される。その限りでは、商品としての商品とは完全に類似する。**第1に**、一方の手から他方の手に移行するのは一つの価値である。商品としての商品(単純な商品)の場合、同じ価値が買い手と売り手の手中に留まり、形態だけが異なるだけだ。両者は彼らが譲渡したのと同じ価値——買い手は商品形態で、売り手は貨幣形態で——をもっている。違いは、貸付の場合、取引で価値を手放すのは貨幣資本家だけだ。彼は、将来の返済によってこの価値を保持する。貸付の場合、一方の側のみが価値を手放すのであり、一方の側によってのみ価値が受け取られるのだ。——**第2に**、一方の側では現実の使

用価値が譲渡され、他方の側ではそれが受け取られて消費される。だが、通常の商品とは異なり、この使用価値は、それ自体が価値である。貨幣の資本としての使用によって得られる価値の大きさのうち、最初の価値を超える超過分である。利潤がこの使用価値である。

[51]貸し付けられる貨幣の使用価値は、資本として機能する(平均利潤を生み出す)ことだ

貸し付けられる貨幣の使用価値は、資本として機能しうるということ、また、資本として、平均的事情のもとでは平均利潤を生産するということである[原注57]。

[原注57]「利子を取ることの正当性は、人が利潤を上げるか否かにかかるのではなく、それ〔借入金〕が正しく用いられれば利潤を生むことができるということにかかっている」(j. マッシー)。

[52]産業資本家は何を支払うのか？ 貸し付けられる資本の価額とは何か？

では、産業資本家は何を支払うのか？ また、貸し付けられる資本の価額とは何か？ 「借り入れられたものの使用に対して利子を支払うもの」は、マッシー※(14)によれば、「それが生産することのできる利潤の一部である」[原注58]。

[原注58]「裕福な人々は、自分たちの貨幣を自ら使用せずに他の人々に貸し出し、彼らに利潤を上げさせて、こうして上げられた利潤の一部を所有者のために保留させるのである」(マッシー)。

※(14)マッシーについて

マッシーは、ペティとロックが、「利子率は貨幣量によって決まる」と主張するのに反対して、「利子は利潤の一部分である」と主張し、利子率を利潤率から規定する。ヒュームも、利子と利潤の関連を主張しているが、マッシーのほうが2年早く、しかもヒュームより徹底しており、優先権はマッシーにある。マルクスはマッシーのこの論述をこの52段落で紹介している。さらに、マルクスは、「自然的利子率は存在しない」(「第22章」全集版374~375)と述べて部分でもマッシーの文を引用している。

[53]貨幣商品の売り手と買い手

①貸付の場合、貨幣を手放すのが売り手であり、貨幣を商品として受け取るのが買い手である

通常の商品の買い手が買うのは、商品の使用価値であり、彼が支払うのは商品の価値である。同様に、貨幣の借り手が買うのは、貨幣の資本としての使用価値である。だが、彼は何を支払うのか？ 貨幣は等価物なしで手放され、一定期間後に返済される。貸し手は、価値が彼の手から借り手の手に移行した後も、常に同じ価値の所有者であり続ける。単純な商品交換の場合は、貨幣はいつも買い手の側にある。貸付の場合は、貨幣は売り手の側にある。貨幣を一定期間手放すのが売り手であり、貨幣を商品として受け取るのが資本の買い手である。

②借り手は、借りた貨幣を、価値+剰余価値(利子)として返済しなければならない

借り手は貨幣を資本として、自己増殖する価値として、借り入れる。借り手は、その使用によって自己を増殖し、自己を資本として実現する。借り手は、借りた貨幣を、価値+剰余価値(利子)として返済しなければならない。利子は、彼によって実現された利潤の一部分でしかありえない。なぜなら、借り手にとっての使用価値は、それが彼に利潤を生産するからだ。利潤を生産しなければ、貸し手の側から使用価値の譲渡は行われなかったであろう。他方、利潤全部が借り手のものになることはできない。全部が借り手のものになったなら、彼は使用価値の譲渡に何も支払わず、前貸しされた貨幣を単純な貨幣として貸し手に返済するだけで、実現された資本としては返済しなかったことになる。

[54]貸し手と借り手は利潤の分割によってのみ、貨幣は資本として機能することができる

貸し手と借り手は、同じ貨幣額を資本として支出する。だが、それが資本として機能するのは、借り手の手中においてだけだ。同じ価値額が二人の人物にとって資本として二重に定在することによって、利潤が二倍になりはしない。利潤の分割によってのみ、それは両者にとって資本として機能することができる。貸し手のものとなる部分は、利子と呼ばれる。

[55-56]資本としての商品・利子

①貨幣資本家と生産的資本家との間では、資本としての資本が商品になる

取引全体は、2種類の資本家、貨幣資本家と生産的資本家(産業資本家または商業資本家)との間で行われる。忘れてならないのは、ここでは、資本としての資本が商品であることだ。ここで現れる全ての関係は、単純商品の立場からは、不合理なものであろう。売買ではなく貸借であるということが、商品——資本という商品——の独特な性質から生じる区別だ。

②貨幣資本家と生産的資本家の間で支払われるものは、商品の価格ではなく利子である

(利子を貨幣資本の価格と呼ぶのは価格の不合理な形態であり、商品の価格の概念と矛盾する)

貨幣資本家と生産的資本家の間で支払われるものは、商品の価格ではなく利子であるということも同様である。もし、利子を貨幣資本の価格と呼ぼうとするならば、それは価格の不合理な形態であり、商品の価格という概念と全く矛盾する。この場合、価格は、あれこれの使用価値として機能する何らかのものに対して支払われる一定の貨幣額であるという、全く抽象的で無内容な形態に還元されている。他方、価格は、その概念からすれば、この使用価値の貨幣で表現された価値に等しい。

[57]資本の価額としての利子の不合理性

①利子生み商品は、異なる二重の価格(①貨幣資本の価値、②利子の価格)をもっている

資本の価格としての利子というのは、全く不合理な表現である。ここでは、一つの商品が二重の価値をもっている。価格は価値の貨幣表現であるのに、一度はある価値〔貨幣資本の価値〕をもち、次にはこの価値とは異なる価格〔利子の価格〕をもっている。貨幣資本はある価値額、一定商品総量の価値にほかならない。商品が資本として貸し付けられても、その商品はある価値額の変形形態にすぎない。

②商品の価値と質的に異なる価格というのは、筋の通らない矛盾である

では、どのようにして、ある価値額がそれ自身の貨幣形態で表現されている価値以外に、ある価格をもつとされるのか？ 価格とは、商品の使用価値とは区別された商品の価値である（このことは、市場価格の場合も当てはまるのであり、市場価格と価値との区別は質的ではなく量的にすぎず、価値の大きさにしか関係しない）。価値と質的に異なる価格というのは、筋の通らない矛盾である。

[58]利子は貨幣資本の価値増殖を表現し、貸し手に支払われる価格として現れる

資本は、価値増殖によって自己が資本であることを示す。価値増殖の程度は、資本が資本として自己を実現する量的程度を表現する。資本によって生産された剰余価値の率または高さは、前貸しされた資本の価値と比較することではかることができる。利子生み資本の価値増殖の大小も、利子額を前貸しされた資本の価値と比較することで、はかることができる。だから、価格が商品の価値を表現するとすれば、利子は、貨幣資本の価値増殖を表現し、貨幣資本と引き換えに貸し

手に支払われる価格として現れる。根本的前提は、貨幣は資本として機能する。したがって、即自的資本として、第三者に引き渡されることができるということだ。

[59]貨幣＝潜勢的資本

①資本としての貨幣価値は、貨幣としての価値によってではなく、資本の所有者のために生産する剰余価値の分量によって規定されている

資本の使用価値は、利潤を生産するということだ。資本としての貨幣または諸商品の価値は、貨幣または諸商品としての価値によってではなく、資本または諸商品がその所有者のために生産する剰余価値の分量によって規定されている。資本の生産物は利潤である。資本主義的生産の基礎では、貨幣が貨幣として支出されるか、それとも資本として前貸しされるかは、貨幣の使用法の違いにすぎない。

②貨幣は潜勢的に資本である。なぜなら、(1)貨幣は生産諸要素に転化されうる、(2)資本の基盤上では賃労働が存在するため、貨幣は潜勢的資本であるという属性を有しているからだ

貨幣または商品が、即時的、潜勢的に資本であるのは、労働力が潜勢的に資本であるのと全く同じである。なぜなら、(1)貨幣は生産諸要素に転化されうるし、生産諸要素の抽象的な表現、生産諸要素の価値としての定在だからだ。(2)富の素材的諸要素は、それらを資本にするもの——賃労働——が資本主義的生産の基盤上では目の前に存在しているので、潜勢的にはすでに資本であるという属性を有しているのだ。

[60]資本所有が資本主義的生産過程から切り離されて、次のことに表現されている。①貨幣は潜在的資本である、②貨幣は資本として販売される、③貨幣は自己を増殖する価値であること。

素材的富の対立的な社会的規定性——素材的富の賃労働としての労働に対する対立——は、生産過程から切り離されて、資本所有そのものの中にすでに表現されている。この一契機〔資本所有〕は、資本主義的生産の不断の結果であり、この過程の不断の前提なのであるが、この一契機が、資本主義的生産過程から切り離されて、次のことに表現されている。①貨幣は潜在的に資本であること、②貨幣は資本として販売されうること、③貨幣は資本形態において、他人の労働に対する指揮権であり、他人の労働を取得する請求権を与え、自己を増殖する価値であること、である。ここでは、資本家の側からの代償としての何らかの労働がではなく、この関係〔資本＝賃労働関係〕こそが、他人の労働を取得するための権限および手段である、ということが明瞭になる。

[61]利子と本来の利潤〔企業者利得〕とへの分割の法則

①需要と供給が一致すれば、競争に関わりなく、商品の市場価格は生産価格に一致する

資本が商品として現れるのは、利子と本来の利潤〔企業者利得〕とへの利潤の分割が、諸商品の市場価格と同様に、需要と供給(競争)によって規制される限りにおいてである。だが、類似と同様に区別もある。需要と供給が一致すれば、商品の市場価格は生産価格に一致する。その場合、商品の価格は、競争に関わりなく、資本主義的生産の内的諸法則に規制されるものとして現れる。

②利子の分割は、競争によって命令される法則以外に分割の法則は存在しない

貨幣資本の利子の場合、事情が異なる。利子の場合、競争によって命令される法則以外に、〔本来の利潤と利子とへの〕分割の法則は存在しない。なぜなら、「自然的利子率」というものは存在しないからだ。自然的利子率の意味するものは、自由競争によって確定される率のことで

ある。利子率の「自然的」限界というものも存在しない。

[62]利子生み資本の場合、全てが外面的なものとして現れる

利子生み資本の場合、全てが外面的なものとして現れる。資本の前貸は、貸し手から借り手への資本の単なる移転として現れ、実現された資本の還流は、借り手から貸し手への利子を伴っての単なる逆移転、返済として現れる。同じことは、資本主義的生産様式の内在的規定——利潤率は、個々の一回転中に得られた利潤の、前貸しされた資本価値に対する比率によってだけでなく、この回転時間そのものの長さによって規定され、産業資本が一定の期間中に生み出す利潤としても規定されるということ——についても言える。利子生み資本の場合は、一定期間につき一定の利子が貸し手に支払われるというように、全く外面的なものとして現れる。

[63]ミュラーは利子について何も理解していない(現象面を見ているだけ)

アダム・ミュラー※(15)は言う。「物の価格の決定の場合には、時間は問題にならない。利子の決定については、時間が主として考慮される」。生産時間および流通時間が商品価格の規定にどのように入り込むのか、また、資本のある与えられた回転時間あたりの利潤率がどのように規定されるのか、しかも、ある与えられた時間あたりの利潤の規定によって利子の規定がなされるということが、彼には理解できない。ここでの彼の思慮深さは、いつものように、表面の砂埃を見て、この埃を何か神秘的で重要なものであると言い立てることにあただけだ※(16)。

※(15)アダム・ミュラーについて

ミュラーの経済論は、一口に言えば、ロマン的・反動的・神秘主義的である点に特色がある。この 63 段落で「物価の決定には時間は問題とならないが、利子の決定には時間が問題となる」と主張しているように、表面的現象のみに目を奪われ、利子が利潤率によって規定されていることを見抜けない俗論的見解である。特に、複利の問題に関する理論では、「労働者は、労働力という資本の所有者であるから資本家と同じである」とか、「賃金は、この労働力という資本の利子である」とかいうような物神性にとらわれた言葉が多い。マルクスは、ミュラーの経済学上の浅薄な理解の由来を、経済学的事実に対する広範な無知と哲学に対するディレッタント(専門家ではないが、文学・芸術を愛好し、趣味生活に憧れる人)的な溺れ方とに帰着させている。ミュラーのやり方はすべて事物の外観を神秘化し、詩化するロマン主義に固有な特色を示すものだ、と評している。

※(16)「表面の砂埃が神秘的で重要なものである」と言い立てる学者・評論家が、今日も多にいる

マルクスはミュラーを、「表面の砂埃を見て、この埃を何か神秘的で重要なものである」と言い立てる」だけの人物である、と言っている。だが、このマルクスの指摘はミュラーだけに当てはまるのではない。目の前に見える現象に幻惑されて、現象の奥に潜む本質まで見極めようとする経済評論家が余りにも多いのではないだろうか。少なくとも、テレビの解説者として登場してくる多くの経済評論家を見ていると、そう思わずにはいられない。

※追記〔ニューヨーク市で、「民主的社会主義者」を名乗る市長が誕生する〕

本レポートを作成中に、嬉しい知らせが日本に飛び込んできた。米国の富を象徴するニューヨーク市で、「民主的社会主義者」を名乗る市長（民主党進歩派ゾーラン・マムニダ氏）が誕生したのだ。

繁栄を下支えする多くのニューヨーク市民は、物価高や家賃高騰に苦しむ毎日。マムニダ氏は、家賃の凍結、公共バスや保育の無償化、市直営スーパー設置などで、「生活できる市にしよう」と訴えた。その財源は「富裕層への課税強化」だ。これらの政策は、一部の富裕層以外の 99%の市民が賛同できるものだ。

予備選に名乗り出た頃のマムニダ氏の支持率はわずか 1%であった。無名の候補が、「一部の大金持ちが牛

耳る政治を大多数の市民に取り戻そう』と訴え、エスタブリッシュメント（支配階級）を代表したクオモ前州知事打ち負かしたのだ。

最も訴えが響いたのは、20 ～ 30 才代と言われている。多くの若者が、全ニューヨーク中を上記の政策を訴えるために、一軒一軒戸別訪問した（支持を取り付けるために何度も訪問し、市民との対話を深めていった）。草の根の支持拡大の合い言葉は「いつでも戸別訪問」だった。

大富豪 26 人が当選阻止のために投入したのは「総額 2200 万ドル（約 34 億円）」。トランプは共和党候補でなくクオモ氏支持を表明。その応援もむなしく、マムダニ氏の圧勝に終わった。トランプ大統領の就任からわずか1年。米最大都市では地殻変動が起こっているのだ。